

平成26年度 第3回大和市文化芸術振興審議会 会議要旨

1. 日 時 平成27年1月29日（木）午後2時00分～午後4時30分
2. 場 所 大和市役所 会議室棟102会議室
3. 出席状況 委員9名（深澤会長、小林委員、坂本委員、直井委員、橋本委員、服部委員、伏見委員、星野委員、吉川委員）
事務局5名（文化振興課長、文化創造拠点開設準備室長、文化振興担当3名）
4. 傍聴人 1名
5. 議 題
 - 1 開会
 - 2 報告事項
(1) 文化創造拠点（大和駅東側第4地区公益施設）進捗状況について
 - 3 意見交換
(1) 文化芸術振興の取り組みの方向性について
 - 4 その他
 - 5 閉会
6. 会議資料
○大和市文化創造拠点指定管理者の指定について

【会議要旨】

- 1 開会
○文化振興課長より挨拶
- 2 報告事項
(1) 文化創造拠点（大和駅東側第4地区公益施設）進捗状況について
○市から、「大和市文化創造拠点指定管理者の指定について」について説明。
委 員：現在、生涯学習センターは本館の役割を担っているが、今後、生涯学習センターが指定管理者となったときの各分館との関わり方はどのようになっていくのか。
事務局：現在の図書館と生涯学習センターを統合した組織を新たにつくり、施設内に事務局を構えていくことを想定している。分館を含めた施策全体のコントロールは、その課が担う予定である。
- 3 意見交換
(1) 文化芸術振興の取り組みの方向性について
会 長：文化芸術振興の取り組みの方向性について意見交換をしたい。何らかの結論を導き出すものではなく、委員間、あるいは審議会としての共通認識を深めるために実施するものである。そのため、日頃、文化芸術の振興について考えていること、感じていることを自由に話してもらいたいと思う。
会 長：①日本の大学には、演劇関係のカリキュラムがあまりない。あるとしても、日本大学の芸術学部や早稲田大学の演劇学科のように、プロの演劇人や専門の研究者を養成するためのものしかない。
欧米の大学は、プロを養成するためだけでなく、人との関わり方や立ち回り方などを

身につけさせるため、一般教養として演劇関係のカリキュラムが設けられている。日本の学生たちはプレゼンをさせると、声が小さく、下を向いて相手を見ないで話をするケースが多く見受けられる。社会を生きる上で欠かせない表現力やコミュニケーション能力を養うために、演劇的パフォーマンスを学ぶ場を増やしていくべきと考える。

②ドラマの中には、必ずと言っていいほど登場人物たちが集う出会いの「場」が登場し、その場で様々な人々が交差するように巧みに演出されている。出会いの場に来ることで、エネルギーを充填し、再び、各々の生活に戻っていく。このような「茶の間空間」を現実の街、生活の中にも作っていく仕掛けが必要なのではないかと考える。

③最近よく街の中、電車の中で、スマートフォンばかりいじって自分の世界に閉じこもっている人を目にする。インターネットから離れ、人との出会いを楽しむことや街を見て歩きたくなるように現実の世界を魅力的にすべきと考える。

委員：行政、教育、文化団体、企業、市民それぞれが役割を認識していかなければ、持続性に優れ、満足度の高い事業展開は図れないと考える。今回は、国の文化芸術の振興に関する基本理念と施策の方向性を示す文化芸術振興基本法に沿って、それぞれが果たすべき役割について考えてみた。

第8条（芸術の振興）、第11条（芸能の振興）、第14条（地域における文化芸術の振興）については、芸術文化ホールと生涯学習センターが推進していく必要がある。特に、芸術文化ホールができることにより、市民の文化意識は確実に向上していくと考える。興行だけでなく、芸術大学や音楽大学との連携を図り、子どもを対象にした事業や合唱、市民オペラなど、市民を巻き込んだ市民中心の事業を企画していくことが必要ではないかと感じている。

第12条（生活文化、国民娯楽及び出版物等の普及）については、生涯学習センターやコミュニティセンター、図書館等が連携して推進していく必要がある。大和市においても増加傾向にある高齢者を対象に、生きがいや癒し、仲間づくり、健康な人づくりの場を提供していくことが必要と考える。また、これらの場を提供することは、多くの人々の心に栄養を与えることになり、医療費の抑制にもつながると考える。

第21条（国民の鑑賞等の機会の充実）については、今後、さらにライフステージに合わせた鑑賞等の機会の創出が求められるため、指定管理者、財団、コミュニティセンター、文化団体、学校が連携した事業展開を強化し、点から面に事業を広げていければよいと考える。

第28条（公共の建物等の建築に当たっての配慮）から第35条（地方公共団体の施策）は、地方公共団体、関係機関、教育機関が連携して推進する必要があるが、個人的には、第31条（民間の支援活動の活性化等）の文化芸術振興への寄附制度の整備について関心がある。現在、景気が上向きになり、企業の業績が良くなることで、法人税の税収が伸びてきている。文化芸術振興への寄附については、税の控除が受けられるといったような制度があってもよいと考える。

委員：①大和市を知らない人が多く、よく「大和市ってどこ？」と言われることがある。今後は、地域のブランドづくりを進めていくことが必要ではないかと考える。例えば、大和市のマークは、「大」をモチーフに鎧の兜を連想させるものである。親しみやすいイラストで市のロゴマークをつくり、上手くPRすれば、多くの方が興味を持ってくれるのではないかと考える。市内全てのイベントに大和市のロゴマークを載せ、「やまと（YAMATO）」を必ず付けて発信することでブランドが少しずつ出来ていくと考える。

②市民に文化創造拠点の存在を知ってもらうためには、情報発信が重要となる。施設の愛称の募集や、「広報やまと」とは別に情報誌を発行し、定期的に魅力を伝えていく取り組みが必要と考える。

③幼少の頃から演劇・ミュージカルを体験することで、一般教養、生きる力を身に付けることができると考える。芸術文化ホールにおいて、演劇パフォーマンスを活かした文化芸術振興事業が展開されることを期待している。

委員：①谷川俊太郎の言葉に「芸術文化は面白くて美しいもの」というものがある。何が面白いかは人それぞれ。文化芸術振興を図るうえで行政が果たすべき役割は、多くの市民が「面白くて美しいもの」に出会い、喜びを感じて暮らせるようにするための雰囲気づくりではないかと考える。そのためには、今やっていることを常に見直し、妥当な内容になっているかどうかの検討を続けていくことが大切と感じている。また、芸術文化ホールで行われる事業を効果的なものにするために、行政は、指定管理者に対して、明確な指示をしてほしいと思う。

②生涯にわたっての文化活動を活発にするためには、社会教育施設の果たす役割が大きいと考える。図書館を貸館、貸本するだけの施設にしてはならない。来館者を増やすことだけにこだわるのではなく、社会教育施設としてやらなければいけないことは何かを意識した事業を展開すべきである。

委員：文化芸術振興の中心的な役割を担うのは、市民である。市民が創りだすイベント（阿波踊り、よさこい、骨董市、国際交流フェスタなど）を大和の文化として定着させていくための取り組みが必要と考える。また、今後は、芸術文化ホールをいかに有効に活用していくかが重要となってくる。大和市には多くの芸術家、アーティストが住んでいるので、こうした優れた人材を活用し、魅力的な事業を展開してほしいと思う。あわせて、次代の文化芸術の担い手となる子どもの文化芸術活動の支援も必要と考える。イベント観光協会としては、市民はもちろんのこと、市外の方にも大和市に足を運んでもらえるように行政、指定管理者と連携し、今までにない新しい視点を持って取り組みたいと考えている。

文化創造拠点ができることで、市民が溜め込んできた文化に対する想いが一気に花開くチャンスが到来する。これを機に大和市の文化水準が大きく向上することを期待している。

委員：自身が音楽家協会に所属しているため、今回、「音楽」の視点から考えた。

①「健康都市やまと」というコンセプトに関連した取り組みを実施してはどうか考えた。大和市内の幼稚園、保育園の運動会などの行事で定番となる「やまとっこ元気体操」（歌詞も大和市にちなんだ言葉を入れる。）を作り、広めてはどうか。幼少の頃から身近にある体操に触れることで市民としての一体感、大和市への愛着が育まれると考える。

②市内の小学校、中学校、高校の卒業式で必ず歌われる「旅立ちソング」を作ってはどうかと考えた。「卒業」という人生の節目に、大和にちなんだ歌詞を歌うことで、①と同様、市民の大和への愛着及び一体感の醸成を図ることができると考える。

③職員によって接客の質の差が大きいように感じている。文化創造拠点ができることにより、市外から訪れる方も大幅に増加することが想定される。その時の職員の対応で大和市のイメージが決まると言っても過言ではないので、職員の応対力の向上に期待する。

委員：①文化芸術振興施策の検討にあたっては、過去、現在、未来の3つの視点を考慮して行う必要があると考えた。まずは、過去の視点。大和市の過去を伝えるモノは非常に重要である。史跡や文献を集め、しっかりと守っていかなければならない。また、大和市の地盤の強さや川の位置などにより、大和市がどのように発展してきたのか。それに伴い、人々のコミュニティがどのように作られ、発展してきたのか。伝統的な祭りはあるのか。人々の関心はどうか。といったことを押さえることで、見えてくるものがあると思う。

②次に、現在の視点。第一に、大学生の文化芸術活動と地域の子どもたちとの関わりについて。現在の大和市は、幼児から高校生までに対する文化活動が盛んに行われ、地域文化と関わりを持っているケースは多くあるように思うが、大学生を対象にした文化活動や大学生が地域の子どもたちとの関わりを持つ活動が少ないように感じるので、今後は、いかに大学生の参加を促していくべきかを考える必要がある。

第二に、商業との関わりについて。市内民間企業との関わりを強く持ち、文化活動に対して支援をしてもらえるように取り組んでいく必要があるのではないかと考える。

第三に、高齢者との関わりについて。市外に勤めていた人たちが、定年を迎え、地域に戻ってきた時の受け皿をいかに用意していくかが重要となる。

第四に、様々な文化活動の交流について。それぞれの活動を個々に行うだけでなく、ジャンル、レベルの垣根を越えて連携していくことで地域文化の活発化が図れるのではないかと考える。また、異文化交流を推進するために、海外友好都市の光明市との交流や「食」に関するイベントなどを実施しているが、もう少し踏み込んだ事業展開を行う必要があるのではないかと考える。

③最後に、未来の視点。少子化が進む中で、未来を担う子どもたちをどのように育てていくか、子どもたちに一流の文化芸術との接点をどのように持たせてあげられるかを考えていくことが必要である。

また、近隣市との文化的な交流を活発にすることや、どのような大和の文化を世界へ向けて発信できるのかを探っていくことも重要である。

委員：①大和市と近隣市の音楽ホール等の施設を比較すると、設備機能や規模などに大きな差がある。芸術文化ホールができることで、市民（学生）がより良い文化・芸術活動を行いやすくなることを期待している。また、自分の知り合いや家族の活動を通じて文化的活動に参加することや地域内で交流を持つこと、文化芸術の充実した経験を得ることにより、人生の大きな糧とすることができると思う。

②現在、市内で文化芸術に関する情報を得ようとした場合、広報やまよや回覧版が中心となっているが、今後は、紙媒体と併用しながら、インターネットを始めとする情報媒体での発信にも力を入れるべきと考える。インターネットであれば、広報やまよでは載せきれない詳細な情報を掲載できるので、多くの市民に興味・関心を持ってもらうことができると思う。また、市内の活動団体が各自でホームページを作成するより、行政が情報を一括管理し、閲覧できるようにした方が、サークル会員やイベント来場者の募集の際にも効果的ではないかと思う。

③大人や学生にとっての「文化塾」の開催など、学べる場づくりを進めることで、幅広い年齢層が多様な文化にアプローチしやすくなり、国内外や地域の文化芸術を知る市民を増やすことができると思う。また、大和市の特徴として多くの外国人が住んでいることが挙げられるので、文化芸術の面から国際理解・交流を深めることができないかを考えていく必要がある。

委員：仙台市の定禅寺ストリートJAZZフェスは、大和市の文化芸術振興に参考になることが多くあると感じているため、このイベントを基に考えを述べたい。

- ①「地元出身芸術家の育成（ヒト）」について。地域の音楽団体や美術団体の協力を得て、地元出身の芸術家に発表の機会と場を提供することにより、国内や世界で通用する芸術家を育てる環境を作る。そして、将来大和市から文化芸術を発信する担い手になってもらい、大和が「文化芸術の都」として世に知られるようにできないかと考えている。
- ②「芸術祭の開催（コト）」について。芸術家を育てる環境づくりの一環として、市民参加型の芸術祭を開催する。企画・運営は学生や市民ボランティア等で構成する実行委員会が担当し、運営資金は協賛金を募る。具体的な先行事例として仙台市の定禅寺ストリートJAZZフェスや横浜トリエンナーレ等を参考にしながら年中行事化を目指す。大和市の単独開催にこだわらず周辺都市との連携による開催も検討してはどうか。
- ③「芸術文化ホールの活用（ハコ）」について。芸術文化ホールを「地元出身芸術家の育成（ヒト）」、「芸術祭の開催（コト）」を実現するための中心的施設として、大和の文化芸術の発信拠点として活用する。そのためには音楽、美術、工芸、古典芸能等あらゆるジャンルの芸術を発表することができるように機能を充実させることが必要であると考えます。

事務局：（欠席された米屋委員の意見を発表した。）

会長：各委員からの意見を踏まえ、意見交換をしたい。

会長：これからのまちづくりは、横の広がり、繋がりを持つリゾーム型をいかに作り出していくかが重要となる。また、固有名をいかに作り出していくことができるかも重要なポイントと感じた。近隣市であれば「町田」のような集客力、存在感の持つまちになるには何が必要なのか、分析してみてもよいかもしれない。

委員：大和市が誇れるものとして、月見野遺跡、多く残る緑（自然）の存在がある。今後は大和駅プロムナードをより効果的に活用できるよう、検討していくべきと感じる。

委員：マーケティングの発想から、大和市を象徴するような芸術家や文化芸術活動を育てることが大切だと思う。総花的に何でもやっていますというよりは、戦略的に集中と選択を行い、それを重点的に育成していく方が望ましいのではないかと。

委員：いくら行政側で目玉をつくっても、そのまちに歴史的、文化的な背景がなければ、絵に描いた餅になってしまう。また、財源確保の課題をクリアできなければ実現は難しいので、民間企業からの支援や国の補助金を上手く活用していくことが必要と考える。

委員：今年度、大和市では、雑誌「ぴあ」の表紙イラストで知られる市内在住のイラストレーター及川正通先生にデザイン依頼し、コミュニティバスのラッピングを行った。とても素晴らしい取り組みではあるが、市内外へのPRが不足しているように感じる。

会長：魅力的な取り組みは積極的にPRしていくべきである。その点においても、情報発信力の強化はとても必要なことである。

委員：市内の駅の電車発車メロディを大和市出身の有名人の曲にするのも市をアピールするツールの一つかもしれない。

委員：次の世代を担うリーダーの育成が必要である。市内に大学はないが、学生は多く住んでいる。市外ではなく市内で活動してもらえよう環境づくりや取り組みが必要である。

委員：子ども会やジュニアリーダーに所属する子どもたちを育成していくことや青少年団体と連携していくことは大事なことである。

会長：おしゃれでさわやかな雰囲気のみちがつくられれば、若い人たちも集まってくるのではないか。

委員：青山通りに夢中な親は、同じように子どもも夢中になるというのを聞いたことがある。若者が「何かおもしろそう」と思うようなことがないと難しい。若者が興味を持つモノは何なのか考える必要がある。

委員：「札幌よさこいまつり」は大学生が実行委員になって実施している。若者が中心になり企画しているイベントは若者が多く集まる。若者が好む環境づくり、仕掛けが必要。

委員：相模原（相模大野駅）に市民・大学交流センター「ユニコムプラザさがみはら」がある。この施設は大学生が様々な活動をする拠点となっており、ブースやPCなどの備品を安価で借りることができる。大学生にとって魅力的な場所をつくることも若者を集める方策の一つであると思う。

4 その他

○市から、平成27年度 文化芸術振興審議会開催スケジュールについて説明。

来年度の開催回数は3、4回を予定している。次回の開催は、5月末を予定している。後日、改めて日程の調整をすることを報告。

○市から、「文化創造拠点現地見学会」について案内。

平成27年3月21日（土）に現地で見学会を開催する。本審議会として開催するものではなく、自由参加となる。詳細については、近日中に案内文書を郵送する。

5 閉会